

大学出版

The Association of
Japanese University Presses

No.136

2023.11

秋

【特集】「本のある場所」をつくる人たち

「本のある場所」を拡げる力

「一冊！取引所」がめざすもの 渡辺佑一 1

自分たちなりの、もうひとつの選択肢を

愛知県名古屋市中区 ON READING 黒田杏子 7

本屋と本のあるところ

東京都三鷹市 UNITE 大森皓太 12

非効率な「本屋」を愉しむ

栃木県那須烏山市 NAYA BOOKS 高田直樹 17

【連載】何年経っても忘れられない、編集者の一冊《11》

田路貴浩編

『分離派建築会——日本のモダニズム建築誕生』 大橋裕和 表2

大学出版部ニュース 22



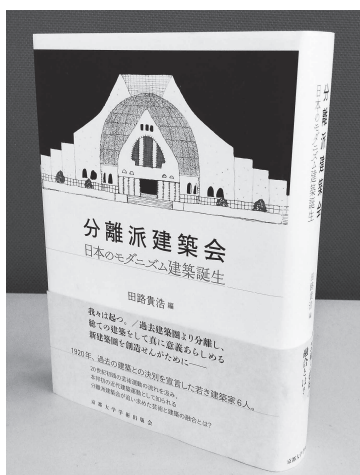
一般社団法人
大学出版部協会

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

田路貴浩編

『分離派建築会——日本のモダニズム建築誕生』

大橋裕和（京都大学学術出版会）



分離派建築会六人衆の一人、堀口捨己・画。1920年刊行の『分離派建築会 宣言と作品』（岩波書店）の表紙にも使われている。『分離派』自体は19世紀後半のドイツから広がる芸術運動だが、新世紀、欧風に惹かれる日本の若者たちにも大きな影響を与えた。
装丁：宗利淳一、印刷：亜細亜印刷
[京都大学学術出版会・2020年／A5判上製・592頁・定価4,840円]

「我々は起つ。過去建築圈より分離し……新建築圈を創造せんがために」
一九二〇年、過去との決別を宣言した若き建築家六人。建築における「芸術」を目指して分離派建築会を結成し、様式美ではなく創造性を謳いはじめる。本書は一時代を画した彼らの若く青き活動を追いつつ、その思想、時代背景、現代まで続く影響を考察した論文集である。

——この勇ましい宣言文。面映ゆさも覚えるほどだが、その意気や良し！分離派建築会を体系立って扱った書籍もほとんどなく、宣言文のごとくレトロ建築好きの私も気分が良かった。田路先生の研究室で顔を突き合わせながら、分離派誕生から様式再帰までを描く三二の論考を四つずつ、全八部にカチカチと構築。まさに建築的に構造化する田路先生のクールさは、腕のいい職人の姿を思わせた一方で、分離派諸氏の気負いに当てられた未熟者の私は、モダンで洒落た本にしようとかやデザインのように突っ走っていった。

やりすぎに気づいたのは各章タイトルのレイアウト。飾りをつけ副題も主題と同じ大きさにして派手に主張してみたものの、田路先生から「もうちょっと『普通』にしてくれない？」とたしなめられる。頭を冷やせ、と。浮かれていたようだ。以降、編集者の独りよがり自身に戒めることになる。

それでも「モダンで洒落た本」はできあがった。デザイナーの力による。カバーは分離派建築会の代名詞「漆喰」を思わせる白。そこに一枚の絵をどんと置いた極めてシンプルなデザインが宗利淳一氏から出てきた。シンプルすぎて大丈夫か？、と不安になった。が、さすがは職人の技。立体になってみると、絵と紙の質感、厚み、文字の配置が、一点でパチッと交錯した。本も「建築」の一つであると思わされた、これもまたアルチザンの手腕である。

この清々とした白いカバーを剥いてみると、まるで江戸っ子が地味な着物の裏に紅地をしのばせるかのように、「橙」がしのばされている。モダンに「粋」が隠れている、などと改めて手にとって職人たちの技に頭が下がる。

特集*「本のある場所」をつくる人たち

「本のある場所」を拡げる力——「一冊！取引所」がめざすもの

渡辺佑一（株式会社一冊）

突然ですが、私が出版業界に飛び込んだのは二〇〇〇年四月のこと。学生時代から書店が好きで取次会社に入社をしたのですが、七年ほど勤めて卒業。創業半年の「ミシマ社」に転職しました。最初の社員として入社し、代表の三島邦弘と一緒に直取引営業を立ち上げ、以降十三年間、営業や取引の現場を経験させてもらいました。そこから、二〇二〇年六月に三島が発起人となりスタートした「一冊！取引所」という受発注プラットフォームを運営する新会社に移籍し、気がつけば、三年と数か月が経ったところです。

「書店」という主語の変化

さてこの間、皆さまご承知の通り、いわゆる「書店」はただひたすらに減少の一途をたどり、チェーン店においても寡占化や取次資本による系列化が進行。その流通の中核を担う取次会社もまた、苦しみと変革の渦中にあります。

ですがその一方で、私の仕事現場から見える景色はむしろ、本のある場所が経済原理を超え、全国各地に増殖しているように映ります。独立した個人が開く本屋や、棚貸し型のシェア書店が増えていくだけでなく、「一冊！取引所」の運営担当である私の元には、「うちは書店ではないのですが、自分のお店でも本を売りたいので参加できますか？」というお問い合わせが日々舞い込みます。

カフェ、パン屋などの飲食店や雑貨を扱うお店ならまだわかりますが、なかには自転車屋さんやガソリンスタンド、ジーンズショップに旅行代理店等々、本とは少し距離のありそうな別業態の店舗を営む方からも「本を仕入れたい」と相談が寄せられます。もつと言うと、もはやショップですらない一読者の方からも問い合わせがあります。聞けば、自宅の離れを住み開き、本屋さんを始めたいというのです。「自分が住む近所に本を手にとって見られる場所がない」。

だが、それを嘆いていても仕方がない。ないなら小さくてもいいので私がお店を作ろうと思いました」

といったような想いを私に話してくださいましたその方は、二〇二三年六月、岡山県玉野市にて「ちいさな本やマルコ」を実際にオープンさせました。

さてこうなってくると、いったいどこからどこまでを「書店」として線引きしていいのか、よくわからなくなってきました。ゆえに私は、書店が云々……といったような議論においては、その「書店」という主語はいつたどこまで何を指したもののなのか、気を付けるようにしています。

本稿においては、このように「本を読む人」と「本を売る人」の境目があいまいになってきている状況を指摘しておきます。読者ひとりひとりの本に対する熱意やこだわりが、全国各地に続々と「本のある場所」を開かせる原動力になっていることは間違いなさそうです。

「本のある場所」がひろがる背景とその可能性

ところでこのように一個人でも「本のある場所」を開けるようになった背景には二つの事象があると見ています。

ひとつは「仕入れ手段の多様化」、もうひとつは「読者ニーズの多様化」です。

まず仕入れの面では、大きな取次に頼らずとも新品の書籍をそれなりに調達できるようになったことが大きいです。詳しくは、『本屋、ひらく』（本の雑誌社、二〇二三年）に「本

をどこから仕入れるか」というお題で寄稿しているのでぜひそちらをお読みいただきたいのですが、一旦ここでは、新品の本を仕入れるには、「取次経由」と「直取引」の二系統あること、そして取次経由でもオルタナティブな仕入れ手段として中小取次や少額取引専用サービスが使えること、さらに直取引においては、書店と出版社のやり取りを円滑にする場として「取引サイトの活用」ができるようになったことをご確認ください。

次に、読者ニーズが多様化していることを見てみましょう。これは多品種を苦も無く扱えるインターネット書店の台頭と、書籍売場を縮小しつつある既存書店の苦境の要因でもあります。既知の商品なら手元のスマホを手繰るだけで簡単に購入できるECの利便性を享受できますが、たとえば小規模出版社の本や個人が編むリトルプレスといった未知なる書籍は、一般読者からするとネットの情報だけでは買いくく、店頭で現物の佇まいを確認して購入したいという傾向があります。そしてコロナ禍以降、読者もそういう本との出会いをより求めている状況が観察されます。

これは決して抽象的な話ではなく、「文学フリマ」や「BOOK MARKET」のような即売イベントに実際に足を運んでみたらきくと実感できると思います。機械的複製技術の極みともいえる本の不思議なところは、それを生身の人が熱を持って売ろうする行為を重ねたとたんに独特なアウラが発現するところにあり、それを読者は求めているので

す。

読者は自分がまだ知らない本といい形で出会いたいという潜在的に強く思っている、かくいう作り手自身もまたそうであると感じられることが「本のある場所」を拡げる力の源であり、であるならば、わざわざ本を仕入れて売ろうとする熱ある人が営む「本のある場所」とは、その存在自体がネットと異なる強い磁場を持っていると言えます。

さらに言うなら、いま若年層を中心に、従来のベストセラーとは異なる手触りの本を求める傾向が高まっていると感じます。先にも触れましたが昨今隆盛を極める「文学フリマ」の集客力はその一例かと思えます。ところでその文学フリマに自ら編んだ本を出店する書店主もいます。そして、自分のお店でも当然それ売り、かつ同業者からの求めに応じて他店にも直で卸しています。たとえば盛岡の「BOOKNERD」やんや三軒茶屋の「twilight」やん、幕張の「本屋 lighthouse」やん、岩国の「ヒマール」さんは、書店かつ出版社という立ち位置で、仕入れのみならず卸す

立場としても「一冊！取引所」を使ってくださっています。いわば現代版の「版元」とでも言うべき存在です。

このように「本のある場所」は、地域やコミュニティに根差した存在として、界限の読者ニーズを受け止めながら仕入れた本を売るだけで終わらず、なんのことも本そのものを編み出すことさえするという「出版」の面白さを体現する存在でもあるのです。さらに店頭での会話やイベント、ワークショップなどから芽生えた読者との交流こそ、書き手が広く世に知られるきっかけともなり得るのです。

たとえば、作家のくどうれいんさんのデビュー作『わたしを空腹にしないほうがいい 改訂版』（二〇一八年）は、当時会社員をしながら執筆されたものを地元盛岡のBOOKNERDさんがリトルプレスとして刊行したもので、今でも版を重ねています。作家の安達茉莉子さんの場合は、横浜の妙蓮寺に引っ越し、地元「石堂書店」さんや「本屋・生活綴方」さんとの交流、雑誌から生まれたZINEが異例のシリーズ累計五〇〇〇部を記録。それらを書き下

岩波講座 社会学 全13巻

第1回*2冊同時発売

第1巻 理論・方法

北田曉大・筒井淳也編

第3巻 宗教・エスニシティ

岸政彦・稲場圭信・丹野清人編

社会学における多様な理論的・方法的展開を、近年の進展まで見渡す。国際化・多様化する社会の過渡期的現実を詳細に描き出す。

A5判 定価各3740円
〈内容案内進呈〉



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋
www.iwanami.co.jp

ろしとともに再構成して単行本『私の生活改善運動 THIS IS MY LIFE』（三輪舎、二〇二二年）が刊行されました。お二方とも他版元からの著作も複数あり、「一冊！取引所」内でも大変人気の作家さんです（私も個人的にファンです）。

こういった文脈からも「本のある場所」が各地に増えていることは重要で、単に本を売るだけに留まらず、よりさまざまな文化的機能を担う地域のあることに大きな意味がありそうです。これは商業的なチェーンストアのローコストオペレーションからではなかなか到達し難い地平と思われ、ゆえに出版の新たな可能性であるように映ります。

「一冊！取引所」の仕事とめざすもの

さて、ここで「一冊！取引所」について紹介させていただきます。「一冊！取引所」は、電話やFAXを使った営業スタイルが多く残るなか、アナログで手間のかかる部分をエンジンニアリングの力で変えたいという想いで立ち上げた取引サイトです。書店ユーザーは無料で参加でき、参加出版社（有料）が登録した書籍をブラウザ上からクリック操作だけで簡単に発注することが可能です。さらに、チャット機能やSNSのような使い勝手のプッシュ型営業機能を備えています。なお、商品の出荷手配は、受注を受けた出版社が自ら行います。取次経由なら取次に搬入して、直取引の場合は請求と発送を行う形です。オープンから四年目を迎えた現在のユーザー数ですが、出版社は一一〇社超、店

舗数は一四〇〇軒を突破したところです。さらに商業出版の流通には乗らないリトルプレス の出品者も現在三〇レベルを超える参加があり、この場に多様性をもたらしています。

ところで書店ユーザーのうち、トーハンや日販の番線を持つ「取次経由」で発注可能な書店と、番線を持たない「取引取次なし」のお店の比率ですが、直近だと五五対四五ほどになっていて、これはサービス立ち上げ当初から見た場合、だんだん半々に近づいている（つまり取引取次なしのユーザーのほうがより増えている）傾向にあります。なお直近、書店からの参加申請は月に三〇〜五〇店ペースで、うち六〜七割は取次番線を持たない方々からのものです。書店開業を準備中の方や異業種の方の他、最近ではシェア型書店の「棚主」からの申請も増加中です。もちろん従来型の書店、大手チェーン店の他、外商部からの申請もあります。

といった感じでユーザー数は伸びていますが、とりわけ直取引を希望する参加者が増えていて、さらには法人ではない個人事業主も多いという傾向が見えてきたため、サービス開始から一年半後の二〇二二年一月、サイトの大幅リニューアルを実施。このとき、単なる受発注の情報提供からさらに一歩踏み込む形で、クレジットカード払いで直取引ができる新サービス「一冊！決済」をスタートしました。弊社自身が直の商流を代行することにより、出版社側はこれまで手間とされていた個人への請求書発行や与信管理を

一切気にすることなく、初見の相手でも直送対応だけで直取引を完結できるようになりました。買切のみという点も出版社の売掛管理を簡単にしてくれています。一方、仕入れるお店側からすると、カード払いなら振込手数料を負担せずともよく、カードのポイントが貯まり、さらに出版社によつては買切ということで三〇%以上の粗利が残る掛率設定をしている点が大変に喜ばれています。ちなみに「一冊！決済」開始初月にカードを登録したお店は二〇店、出版社も数社のみしか受注対応できなかったのが、現在は三五〇超の店舗と八〇社を超える出版社・リトルプレス発行者がこれを活用。ますます利用が伸びている状況です。

この「一冊！決済」こそ、他の取引サイトにはない最もユニークな特徴となります。とはいえ「一冊！取引所」はまだまだ未完成で、発展の途上にあります。

「私だつて本を売りたい」
「私だつて本を作りたい」
「私がまだ知らない本にもっともつと出会いたい」

新刊案内

原子力災害により分化・複層化する地域社会

復旧復興に向けた富岡町の道程

前著『被災コミュニティの実相と変容』（2015年刊）で分析した方法を用い、避難指示が本格化した以降の「福島県双葉郡のその後」を描く。

松本行真著

A5判 280頁 定価82500円

そういう熱を持った全国各地のお店と出版社の現場同士が、この場を介してつながれるよう、もつと機能していきたい。そんな気持ちで業務に向き合う日々です。

「本のある場所」とつながるには？

それでは、出版社は「本のある場所」とどのようにつながり、コミュニケーションをとっていくのがよいのか、これまでの職業経験を踏まえ、少し私見を述べたいと思います。その前に、まずは前提となるマインドを共有させてください。出版にかかわる者であるならば、読者に一番近い存在である「本のある場所」の主宰者それぞれが持つ静かな思いに、自分のほうから関心を寄せていくべきではないかと私は考えます。これがすべてにおけるスタートとなります。次に、三つの観点からポイントをまとめます。

①流通面——これまで述べてきた通り、これからの出版社には、取次流通に拘らず直取引にも柔軟に対応できる体制が求められています。直取引の業務とは、やや大げさに

韓国・福祉改革のダイナミズム

「人間らしい生活」を保障するために

韓国の福祉の形成を近現代史に位置づけ、改革の道筋を追求する。生活保障が国民の権利であるとは、どのような姿なのかを考察する。

金早雪著

A5判 206頁 定価39900円

御茶の水書房

〒113-0033 文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751

言う。「自社本の扱いしかないう取次」を運営することと意味は一緒です。ですから、そこで必要な要素（物流・商流・情報流）をどう調達するか、検討していく必要があります。

②編集・モノづくり面——取次流通の存在を前提としていたこれまでの企画方法を、直取引先の存在も含め、それを意識したものに再構築する必要があるそうです。それが非現実的だとしても、思考実験くらいは各自の立場でしてみたいと思います。「流通が本の企画も規定する」ということを再認識すべきです。

さらに、編集者だけでなく書き手やデザイナーにおいても、「本のある場所」の店主やそこに集う市井の方々の営みを明確に認識することができれば、モノづくりの本質的なところにまた新たな刺激と変化が起こるのではないのでしょうか。本の形態や売り方は時代とともに変化し、いままた変わろうとしています。そのヒントや新たな企画の種は、「本のある場所」の現場にこそあるだろうと私は思います。

③営業面——従来型の書店営業では、棚づくりのサポートが重視されていたように思いますが、いま増えている「本のある場所」での売場づくりは、また別の感覚で行われることが多いため、営業からの「分類するための情報」は、あまり求められていません。それより必要なのは、「面白い本を仕入れたい」という思いに寄りそうことであり、その感覚は、一読者が希求する「私がまだ知らない面白い本に出会いたい」という願いにより近いものとなります。

ですから営業をするなら、自分自身がその本を予め読んでおくことは大前提であり、感想を自分の言葉で語れることが「本のある場所」とつながりたいのであれば、必要だと思われま。

あとは、お店の活動にあわせて自社刊行物を「定期的に案内」するための動線づくりが必要です。従来型の一斉FAXは無効です。そもそもFAX自体をお持ちでないことが多く、デジタルツールを活用していく必要があります。

このように、出版社が「本のある場所」とつながるためには、従来あたりまえとされてきた考え方を今このタイミングで再構築する必要があるそうです。

最後になりますが、私の座右の銘は、「本の近くにいたいことがある」というもの。これを読んでくださった皆さまと一緒に、これからも本が拡がる力を信じて「本のある場所」とつながり続けていきたい、そう思っています。

❖一冊！取引所

<https://1satsu.jp/>



特集*「本のある場所」をつくる人たち

自分たちなりの、もうひとつの選択肢を——愛知県名古屋市 ON READING

黒田杏子 (ON READING)

本の効用

あなたの生活の中で、本はどこにあるだろう。図書館にある、書店にある、カフェや美容院にも、職場にも本棚がある。家ではリビングに本棚があつて、テーブルの上には買ってきたばかりの漫画が置いてある。台所には最近は開いていないレシビ本がある。ベッドの脇には昨夜読みながら寝てしまった本があつて、床には、まだ読んでいない本が無尽蔵に積まれている。トイレやお風呂で読む用の本を用意している人もいるし、電車での移動中が、一番本を集めて読む場所だという人も少なくない。本が、暮らしのそこかしこにあれば、そこに本があるということそのものから得られる効用がある、と私は思っている。「読む」以外にも、私たちと本との間には関係が生まれる可能性があるのだ、と。

本屋にある本を眺めているとたまに、これは誰のものなんだろう？　と思うときがある。出版社から仕入れてここに本を並べているのは私（書店主）。だけど「私のもの」とかという少し違う。私だけのものではあれば自由に読みちらかしてもいいわけだし、きれいに並べなくてもいい。一方「お客さんのもの」だと思えるのであれば、雑に扱われたり、立ち読みで一冊丸々読み切ったり、勝手に写真が撮られたりされることに、なぜこんなに心が軋むのだろう。本屋の本棚に並んでいる本は、そこから引き抜いて所有してくれる人を待っている。光って見える本がある。ぱっと開いたページに、ちょうど最近考えていたことが書いてある。そんな風に「わたしのための本」と人は出会う。誰のものかがはっきりしないということは、誰のものでもあると思わせてくれる。本屋は商いでありながら、パブリックスペースでもあると言われる所以はそこにもあるのかもしれない。

れない。

なぜか店で「触っても大丈夫ですか？」と聞かれることがある。触ってはいけない本とは何だろう。他の人のものであること、貴重な資料であること、あるいは“飾り”であること。もちろん本はインテリアになり得る。それは本の持つ効用のひとつである。本と内容のみで関わるのが本質だと思っている人は邪道だと思うだろうし、私自身も本に室内装飾の役割のみを押しつけられると、内容が蔑ろにされたようで腹がたつ。しかし逆に考えれば、なぜ、それは本でなければならぬのだろうか？ 本を置くことで、その空間の持ち主は何を示したいと思っているのだろうか。あるいは、本という物体が空間にどのような影響を及ぼすのだろうか。誰かの家や仕事場にいくとついつい本棚を眺めてしまう。当店の入口脇には、映画監督ジョン・ウオーターズの言葉が貼られている。「If you go home with somebody, & They don't have books, Don't fuck them」。望むと望まざると、本は私の何かを表してしまう。

読書は本を開く前から始まる

二〇二一年に当店の十周年記念として、三一名のアーチストによる架空の本の展覧会『平行書物展』を開催した。展覧会のタイトルは、絵本作家レオ・レオニが幻想の植物について書いた不思議な本『平行植物』（宮本淳訳、工作舎 二〇一一年）にちなんでいる。展示作品は共通する土台で



『平行書物展』で展示したnakabanの作品
(著者撮影)

ても、オブジェの土台は本で出来ていてページも文章もないのだが、クイズのように「元ネタ」をあてて楽しんだり、「これは絶対デイストピアものですよね」とか「この本めっちゃ良さそう！」など登場人物やストーリーについて想像を膨らませてくださる方もいた。あの空間において、オブジェはまぎれもなく、本だった。

J・L・ボルヘスは言っている。「書物はそれを開かない限り、書物ではないのです。紙と皮でできた、間にページのはさまれている箱型の直方体でしかありません。ですが、それをひもとくと、奇妙なことが起こります。私の考えでは、書物はひもとくたびに变化するのです」（語るボルヘス——書物・不死性・時間ほか）木村榮一訳、岩波文庫、二〇一七年）。そこに動かざるテキストがあるはずなのに、なぜか読むたびに印象が変わったり、書いてあったはずの

つくられた本の形をしたオブジェで、私たちが用意した既存の書籍をもじったタイトルとあらずじが添えられている。五〇をこえる本のオブジェがずらりと並んだ様子もなかなか圧巻だったが、さらにお客さんの反応が面白かった。「本」と言っ

言葉が再読しても見あたらなかったり。もしかすると読者の影響を受けないただ一つの本、というものはなく、一冊の本からすこしずつずれた無数の本が、読者の数だけ存在するのかもしれない。

さらに私は、書物は、あるいは読書は、開く前から始まっているのだと思う。「紙と皮でできた、間にページのはさまれている箱型の直方体」を前にしたとき、その時点から私たちに働きかけるものがある。たとえば、本屋において私たちが本を手にとるとき、おおかたの場合はまだ内容を知らない。タイトルや表紙の絵、厚さや重み、紙や触感などによって、私たちは自身の経験や視座を総動員して「どんな本か」を推測している。それはすでに、読書の始まりである。もちろん作者にとって、本は出来上がったときに「完成」しているはずだ。しかし作者がその本を読むようには私たちはその本を読めない。本は、綴じられると同時に、開かれた存在になる。

同じ本の読者として

時に「もの」としての本は、あまりにも不親切である。第一六九回芥川賞を受賞した市川沙央さんの『ハンチバック』（文藝春秋、二〇二三年）をきっかけに、読書パリアリーが話題になっている。私は数年前、点字図書、音声図書を作成している社会福祉法人名古屋ライトハウス情報文化センターが主催している読書会『よむ・きく・はなす』に参加した。「見えない人も見える人も一緒に。本が真ん中、本好き同士が話すだけ」をテーマにしたこの読書会は、毎回一冊の本が課題本として設定され、それを参加者が各々の方法で読んできて、当日テーブルを囲んで話をするというもの。そう聞くとごく一般的な読書会と何ら変わりが無いのだが、視覚に障がいがある人びとにとっては出版されているすべての本にアクセスできるわけではなく、一般の読書会に参加しようと思っても難しい場合もある。ここでは、課題に選んだ作品を点訳・音訳するところから始める

(好評既刊)

日本軍政下ジャワの華僑社会

『共栄報』にみる統制と動員

津田浩司著 厳しい情報統制下で刊行された華僑紙『共栄報』を徹密に読み解き、軍政期の華僑社会の実像を再構築。歴史の空白を埋める労作。 6600円

冷戦アジアと華僑華人

陳來幸編 聞き取りと史料から、暮らした社会活動のディテールを掘り起こし、現代に至る人々の「根」を探る。注目の論集。 4400円

天津の鬼市

路上古物市場をめぐる
〈空間〉と〈場所〉の人類学

櫻井想著 「沈黙交易」に由来する「鬼市」。改革開放を経て巨大な市場経済国家となった中国でなお命脈を保つその謎に迫る。 4400円

辺境からの中国

黄海島嶼漁民の民族誌

緒方宏海著 辺境の島だからこそ顕著になっている諸現象を明らかにすることで、中国社会の実態とその未来が俯瞰できる。 5500円

シバジ

韓国・朝鮮における
代理母出産の歴史社会学

洲上恭子著 女性は子供を産む道具なのか。子孫を残す圧力と構造を深く分析した注目の論考。 7700円

ラクダ、苛烈な自然 で人と生きる

進化、生態、共生

今村薫編 起源と進化、遺伝子、調教、食用、毛織物、そして紛失ラクダからラクダ相撲まで、コンパクトなラクダ百科。 1980円

風響社

〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
〒 03-3828-9249 (定価は税込)
URL: <http://www.fukyo.co.jp>

ため、各々にとって都合のよい方法で本を読むことができるのである。

私が参加した回では、温又柔さんの『「国語」から旅立って』（新曜社、二〇一九年）を取り上げた。作品の中で、見た目で国籍を判断するという場面があり、視覚障がいのある方から「自分は生まれつき目が見えないから、見た目で人を判断するっていうことがわからないんですが、どんな感覚なんでしょうか？」と言われて、はっとした。同じテーブルを囲んでいた晴眼の参加者みなで、ああだこうだと言葉を重ねたが、明確な答えは出せなかった。けれどその問いかけをきっかけに、私たちは普段何を見ているんだろう、見えているってどういうことなんだろうと考えることができた。そして逆に、視覚に障がいがある方たちがどのようにに本を読んでいるのかを聞くこともできた。ケアをする／されるという関係性ではなく同じ本の読者として、晴眼者と視覚障がい者がフラットにお互いの違いへの関心を示して、話ができるという経験は初めてのことだった。障がい、言語、異文化、さまざまな差異がある人間が、どうしたら断絶ではなく良き隣人になり得るか。本にはそれを可能にする力があると思う。だからこそ、必要とする人がある限り、本はもっと開かれるべきだと思う。

生態系の中で

今回、原稿の依頼文に「一冊一冊をパーソナルな視点で

選書していねいに読者に手渡していく営みと、少数数でその本にしかない知見が込められた学術書は、どこかで手を結べるのではないかと想像します」と書かれていて、なるほど、これは生態系の話だなと思った。「本の生態系」というのは、『韓国の「街の本屋」の生存探究』（ハン・ミファ著、渡辺麻土香訳、クオン、二〇二二年）に出てくる言葉だ。当店は、一般流通している新刊書以外にも、少数数の個人出版物や、国内外のアートブック、古書も扱っている。たくさんの方が読む本だけがすばらしいのではない。大きな歴史から埋もれてしまう個人の物語、マイノリティ当事者の率直な声、メインストリームにあがる前の作り手の生々しい衝動。小さな声を拾い集めて遠くまで届けるという点において、学術書の作り手と個人書店は近いまなざしを持つて本の生態系の中で仕事をしているのかもしれない。

また、本の生態系は地域の話でもある。近年、書店の閉店のニュースが相次いでいる。当店が店を構える愛知県名古屋市中でも、新刊書店では二月に七五書店、六月に正文館書店本店、七月にちくさ正文館書店本店と、長く地域の人々に愛されてきた書店がその幕をとじた。名古屋は人口二〇〇万人を超える地方都市で、大型の新刊書店があつて古書店があつて、図書館があつて、一九九〇年代に十代を過ぎた私たちに多大なる影響を与えたヴィレッジ・ヴァンガードが生まれた土地でもある。その中で私たちは二〇〇六年に小さな本屋を始めた。今思えば、自分たちなりの、も

豊かで多様な〈近世〉のすがた

日本近世史を見通す 全7巻

刊行中

各3080円

●列島の平和と統合 近世前期
牧原成征・村和明編 グローバル化のなかで動き出す「近世日本」成立のうねり。

●身分社会の生き方
多和田雅保・牧原成征編 戦争のない「平和」な身分社会を人びとはどう生き抜いたのか？

●宗教・思想・文化
上野大輔・小林准士編 ひろがる書物、いきづく宗教。日本文化の転換期に迫る。

※毎月1冊配本 『内容案内』呈

三浦義村

高橋秀樹著 知略に長け北条氏とともに鎌倉幕府を支えた宿老！
【人物叢書321】 2420円

武士の衣服から歴史を読む

古代・中世の武家服制 2420円
佐多芳彦著 武士は直垂をいかに着こなし、服装の制度を定めたか。

家からみる江戸大名 全7冊

伊達家 仙台藩

J・F・モリス著 「御家」内外の対立と解決から読み解く、仙台伊達家の290年。(第6回) 2420円

時に大衆を動かし、時に統制されながら近代日本を動かした
(メディア)の存在とは！

近代日本メディア史

全2巻 有山輝雄著 各4950円

【I】1868—1918 明治維新後の「文明開化の新聞紙」から、政府による統制、第一次世界大戦まで。

【II】1919—2018 新聞紙によるニュースからラジオ・テレビ・インターネットによるニュースへ。

日記と歴史百科が一冊で便利！

歴史手帳

2024年版 1320円

吉川弘文館

東京文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151
日録・呈 価格税込



うひとつの選択肢をつくるという行為だった。そこから一七年経過した今、状況は変わった。大型新刊書店は統廃合を繰り返しながら店舗を減らし、以前は必ず書店が入っていた商業施設にも今は書店がない。そして商店街や駅前にあったいわゆる「まちの本屋」はほとんど閉店していった。一方で、個人で書店を始める人が近年増えている。もちろん業界全体の解決策になるにはまだまだ遠いが、本屋は文化的インフラだからこそ、街を照らす灯りはひとつでも多いほうがいい。無書店地域が増えていけば、冒頭で書いたような「本が、暮らしのそこかしこにあれば」は、あたりまえの光景ではなくなってしまう。そうした危機感から、一五年前から街なかでのブックイベントや古本市を絶えず開催してきた。新刊書店で購入して読んだ本を十年後に古書店に売る。絶版になった本は図書館にアーカイブされている。大型新刊書店も個人店も当店のような一風変わった店もある。そういう地域内の循環が滞りなく行われ、選択肢が担保されるのが、望ましい生態系の在り様である。オ

ルタナティブであることは今でも変わらず私たちの重要な態度だが、時代とともに常に店の役割を変容させながら「本のある場所」が生き残る道を探している。

ここで書いたことは、深い思索も答えもない、断片的な問いのかけらである。現象としての本。こんなことは売物にもならないし、わかりやすい苦労話でも本屋礼賛でもない。けれど、こうしたかけらを毎日頭の中で転がしながら、私たちは本屋をやっている。いいとか悪いとかじゃなく、本のある場所では何が起きているんだろう、本ってなんだろう、と考え続ける本屋がいていいじゃないかと思っている。

ON READING / ELVIS PRESS

愛知県名古屋市中千種区東山通5-19

カメダビル2A&2B

<https://onreading.jp/>

特集*「本のある場所」をつくる人たち

本屋と本のあるところ — 東京都三鷹市 UNITE

大森皓太 (UNITE)

多様化する本の小売業

本があつて本のあるところが生まれる。この当たり前の事実からはじめたい。本の小売を生業の一部としている身として、ほぼ常に本に囲まれた状態で過ごしている。日常はすなわち本のあるところと言っても過言ではなく、本がない状態に置かれると一転して非日常的な落ち着かなさに襲われるだろう。たとえ出先であつても鞆には本が常時四五冊は入っており、仮に忘れたとしてもスマホがあれば電子書籍で本にアクセスすることができ。したがって、電車の中であつても風呂の中であつても、本のあるところになり得る。このように本のあるところというのは本屋に限ったことではなく、図書館はもちろん、自宅や病院の待合室など本のあるところと言える。

しかし、ここでは本のあるところに本を買い求める場所とい

う限定をつけて、話を進めたい。この場合、その筆頭は丸善ジュンク堂書店や紀伊国屋書店などの大手チェーン書店をはじめとする本屋であるが、そうした(文具などを併売している店舗が多いとはいえ)専門的な本屋に限らずカフェや雑貨店、パン屋、さらにはガソリンスタンドなど、複合的に書籍を販売する店舗は増えている。これは本の小売の業態が多様になっていることを意味しており、この背景には本の仕入れが簡便にできるようになったことが挙げられる。小規模の取引であつても口座を開設してくれる取次会社が存在や、取次を介さない出版社と書店の直接の取引(直取引)の普及、またその直取引をスムーズに行うことができる受発注システム等のプラットフォームの開設など、この数年で従来の流通網のオルタナティブが整備されてきている。かくいう私もこの新しい流通網の恩恵にあずかつており、十年前であれば開業できていないだろう。

「本屋」を名乗るためらい

ところで、「本屋」と「本のあるところ」という言葉を巡って私には葛藤があった。それは店を開店するときのことだ。開店するにあたってはその店がどんな店であるのか認知してもらうためにカテゴライズする必要がある。私の店だと、本を売っているのだから「本屋○○」だとか「○○書店」とつけることができれば最もわかりやすいだろうしかし、それがどうしてもためらわれた。実際に本を売っているのだから名乗ってもいいはずで、そもそも名乗ることには誰の許可も必要ないのだが、なぜ「本屋」と名乗ることがためらわれたのか。それは一つには私の店がカフェを併設する複合的な本屋であるということに起因するだろう。率直に言えば、私は本を売りながら心のどこかで「本なんか売っても仕方がないな」とその薄利に期待していいのである。実際に開店の計画段階でも本の売り上げはほとんど計算に入れていないので、それで「本屋」を名乗るのは実態とは異なるように思えたのである。

そして「本屋」の代わりに最もしっくりくる表現が「本のあるところ」という言葉であった（この言葉については既に福岡県に「本のあるところ」¹⁾というブックカフェがあったために使うのを避け、結局「本と珈琲の店」という表現を暫定的に用いている）。「本屋」というのが小売業としての主たる商材たる「本」というモノを重視した表現であるの

に対して、「本のあるところ」というのはその空間性に重きが置かれた表現である。そして私も本そのものというよりは、本のある空間に価値と可能性を感じている。もちろんこれは本そのものの価値を軽視しているわけではなく（軽視しているのは本の利益構造である）、本があるからこそ生まれる価値を模索したいのである。これは商品そのものに価値があると考え「モノ消費」から過ごした時間や体験を重視する「コト消費」への消費行動の変化と対応するものであるの言うまでもなく、実際に程度の差はあれどこの書店も本の小売以外の部分での利潤を追求しており、今にはじまったことではないだろう。

「ない本」を想う

さて、この私の葛藤から明らかにするのは、やはり専門として「本屋」を経営することが難しいということだ。しかし、それでは困る。ここで冒頭の言葉に立ち戻ると、「本」を支えているのは専門的な「本屋」であり、複合的・小規模な書店では代替し難い価値が専門的な「本屋」にはある。昨今「本のあるところ」が増えていることが注目されているが、私はやはりチェーン書店をはじめとした大規模の本屋の数が少なくなることの損失に対して危機感を抱かずにはいられない。すなわち、専門的な「本屋」があるからこそ、その周囲に小規模の本屋が存在でき、全体として豊かな「本のあるところ」が形成できると考えている。

私の店のような売り場面積が二〇坪程度で扱っている書籍の冊数が五〇〇〇冊程度の店舗であると必然的に「セレクト」という言葉が付随する。当然どの書店も売り場面積には限界があり、仕入れる本の取捨選択をしていない書店はないのだが、新しい流通システムに特徴的な「買い切り」という条件の下では、セレクトの度合いはさらに大きくなる。つまり、「もし返品ができればこの本も注文できるのに」「もし掛け率がよければこの出版社の本も入れられるのに」と発注作業の際に思うことが多々あり、仕入れられない本、すなわち「ない本」について常に意識せざるを得ない。

もちろんその制約が望ましい点もある。年間七万タイトルも新たな書籍が出版される中で、すべての中から書籍を選択するというのは非常にコストが高く、「選ぶのに疲れてしまった」「なにを読めばいいのかわからない」という経験は多くの人に共有されていることであろう。その点、ある程度セレクトされていれば、選択にかかるコストは下がり購入につながるので、お客さんと店の双方にとって利点があるのは間違いない。しかし一方で、置ける本が限定されることによる弊害はあり、特に専門書や単価の高い本などは、大型の書店や大学の生協といった場所でない限り、仕入れることは難しいと言わざるを得ない。したがって、仮に「本のあるところ」が増えたとしても、フォローできないジャンルの本が存在し、現在のような出版物の多様性や専門性は損なわれる可能性があるということである。

この「ない本」ということについて、想像力を膨らませてくれるエッセイを紹介したい。荒井裕樹さんの「絶版」になれない本たちへ」（柏書房編集部編『絶版本』柏書房、二〇二二年）だ。少し長くなるが、冒頭の言葉を引用する。「絶版」という言葉に、私は羨ましさに近い感情をもっている。版が絶えたとはいえ、街の本屋という表舞台には立てたわけだから、「一度は背番号をもらってグラウンドを走れたじゃないか」と言ってやりたい気がするのだ。

変な言い方だが、世の中には絶版にさえなれない本がある。出版即絶版という宿命を背負った本も多い。例えば「私家版」と言われる本の中には、そうしたものが少なくない。

一般的な流通網には乗らないこうした類いの本が、私には「背番号ももらえず、ひたすら河川敷を駆け回る選手たち」に重なって見える。その健気さたるや、中毒になるほど愛おしい。

ここで語られているのは本が本屋という表舞台に立つということの重要性である。本屋が減るということは、そのまま表舞台に立てる本も減るということを意味する。これは荒井さんの言葉で言えば、背番号はもらえても走るグラウンドがないということだ。また、先ほど述べた仕入れられる本が限られることの葛藤に引きつけて言えば、グラウンドはあってもグラウンドに入れることができる本が限ら

知泉書館

ライブニッツ デカルト批判論集 (知泉学術叢書 26)

山田弘明・町田一編訳 デカルト哲学への批判を軸としてライブニッツの思想形成をたどる 新書/368p/4000円

ヘーゲル歴史哲学の 実像に迫る

新資料に基づくヘーゲル像の刷新

松田 純 最後の歴史哲学講義を自筆原稿で検討。旧説を批判し従来と違うヘーゲル像を提示 四六/188p/2300円

ヘーゲル全集 第16巻 自筆講義録Ⅱ (1816-31)

責任編集：山脇雅夫・佐野之人 『哲学史』『世界史の哲学』など、現存する自筆原稿の講義等を収録 菊/562p/9000円

瞬間・脱落・歓喜

ニーチェと永劫回帰の思想

岡村康夫 ニーチェ晩年において決定的な「永劫回帰の思想」から豊かな思索活動を読み解く 四六/560p/4500円

中世ヨーロッパの 社会秩序

(知泉学術叢書 25)

G. デュビイ／金尾健美訳 権力を構成する勢力が三機能を担う経緯を具体的事例で詳細に考察 新書/684p/6200円

東アジア祭祀芸能 比較論

田仲一成 中国・朝鮮・日本の芸能の発生と展開を社会構造と共に解明。現地調査の写真を多数掲載 菊/512p/6000円

東京都文京区本郷 1-13-2 (税別)
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166
<http://www.chisen.co.jp>

れるということであり、これでは背番号はもらえても走るグラウンドがないという事態を解決できないのである。さて、出版物の多様性や専門性が損なわれたときに失われ得るものは何であろうか。その一つが同じく『絶版本』に収められているドミニク・チェンさんのエッセイ「混沌を愉しむ術」にあるように思う。このなかで、ドミニクさんは四方田大彦『文学的記憶』（五柳書院、一九九三年）と中野美代子『奇景の図像学』（角川春樹事務所、一九九六年）という文学評論と図像学というジャンルを異にする二冊の今は絶版になっている本を取り上げ、それらを「知識の森を分け入っていく愉楽」というものの、確かな手触りを教えてくれる書物」と説明し、次のように述べている。

でもある。「……」誰とも分かち合わなかった、いわば世間の喧騒から遠く離れた自分だけの秘密の場所のような本とは、あくまで自分だけの方法で関係性を紡いでいける。その自立した遊戯の経験こそが、カオティックな世界を自分なりに愉しむための術を教えてください。

ドミニクさんの絶版本の二冊があったのは、お母さんの本棚だという。文芸評論と図像学という専門書といつてもよい本が本屋という表舞台に立つことができていたから、本棚に収められてドミニクさんの人生に登場することができたのである。であるとすれば、本が表舞台に立てないときに損なわれ得るものは「知識の森を分け入っていく愉楽」というものの、確かな手触り」ではないだろうか。

小売りから解放された場所

ここまで私の葛藤を述べてきたが、そこで明らかになったのは「本のあるところ」にはその規模や取引の条件から

自ずと制約があること、そして「本のあるところ」では代替できない価値が「本屋」にはあるということだった。では、「本のあるところ」には「本屋」の劣化版のような価値しかないのかという勿論そうではないだろう。この点について、最後に「本のあるところ」と言う表現がはらむ空間性と可能性について考えてみたい。

そもそもなぜ私は本の薄利に期待していないと言いながら「本のあるところ」を営んでいるのだろうか。それはやはり私が「本があることによって生まれる価値」があると考えているからだ。本があることによって生まれる価値はその人が本をどのように捉えているかで大きく異なると思うが、私は本を「何かと何かを媒介するもの」と捉えている。すなわち、本があることでそれまでは関係性のなかったAとBとの間につながりを生むことができる媒体（メディア）として本に価値を感じているということだ。その媒体（メディア）としての本が持つ価値を体现する場所として私の「本のあるところ」はある。

さて、その価値は私の「本のあるところ」ではイベントとして結実している。当たり前だが、場所をもっているということはイベントの開催におけるハードルを低くし、本を売っているという事実は著者を呼びやすくする。つまり本があるイベントを開催しやすいということだ。もちろん書店のイベントは今に始まったことではない。しかし、従来の書店イベントは基本的には本の刊行を記念したもの

が多く、本が主たるものでイベントが従たるものとして考えられている。私が想定しているのはイベントが主としてあり、その従たるものとして本があるようなイベント、つまり自らが主体となって企画するオリジナルのイベントである。イベントの企画においては、本屋は本の小売という受身の存在ではなくなり、自らが新たなコンテンツを生み出す価値の源泉になることができる。またそうしたイベントは本の薄利を補い得るという価値も有している。イベントは本と異なり自由に価格を設定できるため、良い企画を実施できればそれだけ多くの収益を得ることも可能だ。

このように考えると「本のあるところ」は本の小売から解放された場所と定義できるのかもしれない。しかしこれはあくまで「私の」という限定のついた一例に過ぎず、各々が本の価値、そして本があることによって生まれる価値を模索した結果として「本のあるところ」が存在しているはずだ。それは本の薄利という観点のみをもって本そのものの価値を貶めないためのレジスタンスであると、私は考えている。

❖UNITÉ

東京都三鷹市下連雀 4-17-10 S M Z ビル 1F

<https://www.unite-books.com/>

特集*「本のある場所」をつくる人たち

非効率な“本屋”を愉しむ——栃木県那須烏山市 NAYA BOOKS

高田直樹 (NAYA BOOKS)

内側からの歪み

心に残る一言、一文に出会う。それさえあれば、その本にめぐり合えた幸運をしみじみ感じる。それまでの数百行、数千行は、その出会いのための文脈。もちろんそれらにも大きな意味はある。本との付き合い方はそんな一見遠回りのような、時間をかけとぼとぼと歩むような営みだと思っている。近頃やたらと重んじられるコスパもタイパも縁遠い世界。それが本、読書の世界だったのではないか。

それが歪んできた。こともあろうに本屋の内側から歪んできた。一九九六年を出版物の売上ピークにして陰りが出てきた出版業界。出版社、取次、本屋……、いたるところでそれまでの大らかさがしばみ、いかに効率よく稼ぐか、利益を上げるかが最優先課題となってきた。これまで大事にしてきたことさえ、「食う」のためにかなぐり捨てて様相

を呈している。

「典型的な地方ロードサイド」の風景の一角をなす書店チェーンに勤めて二五年ほど経つ。その仕事の傍ら二〇二一年にNAYA BOOKSという小さな本屋を開いた。

典型的な、と敢えてやや揶揄を含むような書き方をしたが、そこにも本を愛し、いかに読者に届けるかを腐心し続ける本屋のスタッフはたくさんいるし、本を求めて日々足を運んでくれる読者も多い。

私は一九九〇年代終わり頃に大学を卒業し、この業界に入った。当時はまだ、年に何点かは「一〇〇万部突破のベストセラー」が生まれ、一度火が付けば売場から見ると本が消えていくような時代だった。

時は移り二〇二三年、書店業界はもはや破綻寸前と言える。書店閉店のニュースは珍しくもなく、出版社、取次の動きも喧しい。業界全体で生き残りをかけて四苦八苦して

いる。だが、いち書店員からするとどうも自分たちの利益配分にばかり血眼になっていて、読者を見ていないと感じる場面も多い。

本屋を津々浦々に開かせ、「知のインフラ」作りに大きな貢献をした再販維持制度が今や悪者のように語られている。返品率が高い、本屋が本を知らない、制度に甘えている……等々、反論できない部分も多い。最近では売上不振・利益率改善の策としてインセンティブ、販売報奨金なるものもてはやされている。良い本を読者に届けたい。社会の動きを映した本を並べたい。売場でお客さんと本との出会いや気づきをお手伝いしたい。本屋はそういうことを追いかけてきたはずだが、一にも二にも効率、そして利益を追うようになってきた。

リアルな場で本の世界を保つ

NAYA BOOKSを作ったのはそんな流れの中だった。もともと畑仕事をするときの道具や耕運機をしまつてあった納屋だった場所を五か月ほどかけて本屋にした。すぐ後ろは畑。今でも父がきゅうりや白菜を作っている。食べきれない野菜は販売もしている。それを目当てに来てくれる方も多い。周りは田畑に囲まれたのどかちよつと辺鄙な場所、本屋を始めた動機を聞いてくれる方も多い。

いくつか理由を挙げてみよう。一つ目は、自分が生まれ育った地域に本屋があったほうがいいな、と思ったからだ。



NAYA BOOKS外観（著者撮影）

自宅の周辺から本屋に行こうとすると車で一五分はかかってしまう。「散歩の途中にちよつと寄る」という距離には本屋はない。読書離れなどともいわれるが、私は、読者が減ったのではなく、本屋で本を買う人が減少したのだと思っている。そもそも本を買う場所が減っているのだ。

街中の本屋が閉店しても、周辺の本屋の売上は見込みほど上がらないことが多い。もちろん、ECサイトに流れている人もいるとは思いますが、少なくともリアル書店界隈からは「消滅」する。それほど、人と本のリアルな接点が減るということは、取り返しがつかないことなのだ。

視界の端にでも「本屋」や「本」を捉え続けておいてもらうこと。これが、リアルな場で本の世界を保とうとする上でどうしようもなく大きなことではないかと思っている。既に多くのところで、八百屋も魚屋も駄菓子屋もCDショップも消えてしまっている。そしてそれを特段不便に思わず暮らして（しまつて）いる自分がいる。多くの人は本屋

資本とイデオロギー

ピケティ 記念碑的研究。「格差は経済的なものでも技術的なものでもない。イデオロギー的政治的なものだ」山形・森本訳 ¥6930

励起 [全2巻]

仁科芳雄と日本の現代物理学
伊藤憲二 日本の科学研究の基盤と伝統はいかにして築かれたか。原子物理学の父・仁科を軸に辿る科学史。上 ¥5940 下 ¥6600

[完訳版] 第二次世界大戦

第1巻 湧き起こる戦雲

チャーチル ノーベル文学賞を受けた英宰相が自ら語る大戦記録。主著(全6巻)を全面新訳で毎夏1巻刊。伏見威蕃訳 ¥6050

アルツハイマー病研究、失敗の構造

ヘラッパ この病の研究分野は一つの仮説に捉われ機能不全に陥った。インサイダーの良心的告発と提言。梶山あゆみ訳 ¥3520

生まれつき男社会に服従する女はいない

ガルシア フェミニズムに残された「服従」という難問。『第二の性』を指針に鋭い哲学者がその原理を解く。横山安由美訳 ¥3850

投票の政治心理学

投票者一人ひとりの思考に迫る方法論
ブルーター／ハリソン 選挙の機能と影響に着目。投票行動の心理に迫る大規模な挑戦的研究。岡田陽介監訳 上原直子訳 ¥6380

アタッチメントと新規時直し

ジョナサン・ベダー論文集 英国精神分析の発展を支えた心理療法の臨床論ほか全8篇。ウインシップ編 筒井亮太訳 ¥5940

東京文京本郷 2丁目20-7
tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税込)
www.msz.co.jp

みすず書房

年後にじんわり効いてくるような本を並べている。
本の扱いについては、経験・知識・専門知は蔑ろにされることが多くなった今、それに抗いたかった。NAYA BOOKSに並ぶ本は売れているとか、話題とか、実用性などから距離をとった本ばかりである。すぐには役に立たない本、本人が気づかないレベルでなんとなく胸に残って数年後にじんわり効いてくるような本を並べている。

二つ目の理由は、本屋のあり方を再認識しなかったからだ。これには二つの視点がある。一つは本そのものの向き合い方。もう一つは読者との接し方だ。
本の扱いについては、経験・知識・専門知は蔑ろにされることが多くなった今、それに抗いたかった。NAYA BOOKSに並ぶ本は売れているとか、話題とか、実用性などから距離をとった本ばかりである。すぐには役に立たない本、本人が気づかないレベルでなんとなく胸に残って数年後にじんわり効いてくるような本を並べている。

が無くなくても特段困らないのだ。それに抗いたかった。
三坪ほどのちっぽけな古本屋(スタート当初は古本のみだった)でも、そこには少ないながらも店主の選んだ本が並んでいて、自由に選べて机に座って読んだりできて、望めば本について会話のできる場所を打ち立てたかった。本のある空間に身を置く楽しさや、その雰囲気そのものを心に留めておいてほしい——。本との出会いの場を開き続けること、これが自分にできる唯一のことだと思った。

様々なものに常に接続させられ、効率の良さが求められる今、本を読んでいる時間はどこか世の中から隔絶されて宙ぶらりんになっているように思う。この隔絶と宙ぶらりんの感覚を大事にしたい。刹那的に答えを求めたりせず、時に数年かけて考え何かに手を伸ばし続ける。これが面白いし、本読みの醍醐味だと思うのだ。
あくまで自分が「いい」と思う本を、信じられる本を、並べ続ける。「売れる」ことを目的にしない。もちろん売れることはうれしいが、それを目的化してしまえば自身の存在理由がゆらぐ。そこには線を引き続けていきたい。そしてもう一つ、読者との接し方。NAYA BOOKSは三坪程度と小さいので、お客さんが二人も入れば少し窮屈になってしまふ。店主の私とお客さんの距離感も一対一に近いものになる。ひとたび声をかけられればあれこれと会話が生まれる。一人のお客さんと一時間くらい話してしまうこともままある。好きな作家、探している本といった話題から、「この間こんなことがあって……」「先日遠くの本屋

さんに行ってきたね……」などと話は多岐にわたる。これが面白く勉強にもなる。

スタッフとお客さんという売り買いを前提とした関係性とは、ちょっと違う関係性。必ずしも売り買いが発生しなくてもふらりと立ち寄って話をして——、というのが許容される空間。これは、いかに素早く稼ぐかという観点で見ればいかにも非効率で非合理的かもしれない。でもこれが楽しいし、人間が営む空間に人間が足を運ぶ理由として大きいのではないか。これを本当に排除しきってしまったら、なんだかとても寂しい気がするのだ。

本を渡す営みに堆積するもの

三つ目の理由はとても個人的なものだ。本、本屋、人間（なかでも本を売る側の人間）の可能性を探り、高めるよりも「余計なことは考えずに」効率的に稼ぐことを強く求め続けることに倦んでしまった。本屋として自分の手に何があるって、何をしたいくて、どうなりたいのか。これを見失いかけていたように思う。ならば、自分の思うかたちの本棚、本のある空間を作って世間に晒してみても、審判を仰いでみたい。その思いが抑えられなくなったのだ。もし少しでも気に入ってくれば人はきつと来てくれるだろう。

オープン前には「田舎だから」「本読む人なんか周りにいない」などいろいろな声が聞こえてきた。それらを聞くたびに「だからこそ作るんだ」という思いを強くした。「読

まない」なら「面白さを伝え続けてみよう」と思った。

とはいえ、会社組織の中で二〇年以上を過ごし、世間に自分の価値観をそのまま晒すことはほとんどなかったゆえオープンの日はとても怖かった。今でも一人二人とお客さんを迎えることは少し緊張する。

NAYA BOOKSは、そのほとんどが自分個人の価値観で作られている（唯一の例外は貸し棚の売場だけだ）。お客さんに棚を見てもらうことは、嬉しいと同時にとても怖い。何かを買ってもらえると、喜びと同時に感じるのは安堵だ。時間を割いて足を運んでもらって、何も出会いがなかったら申し訳ない。何か一冊でも出会ってもらえたのなら心底ホッとする。その繰り返しでここまでやってきた。

開店から約二年が経とうとしている。概ね、月に四、五回は扉を開くことができている。数えてみたらこれまでに一〇〇〇冊以上の本を手渡すことができた。『百年の孤独』『森の生活』『嘔吐』『夜と霧』……。これらは何度も売れていった本たちだ。その他にも医学書院の「シリーズケアをひらく」なども仕入れるとすぐに売れてゆく。畑の片隅の納屋で、である。概してそこに書かれている言葉を噛みしめるような本がよく売れる印象を持っている。あるいは、生活や人生を振り返り見つめなおすきっかけになるような本が多く手に取られる。

あるとき、小さな女の子からは「ありがとう」という言葉とともに四葉のクローバーをもらった。お客さんから直

接感謝の言葉をもらうなんて慣れていないのでとても驚いた。そしてこれはこれまでの本屋人生の中でも特に強く胸に刻まれている出来事だ。

またある子は、人が大勢いる場所、にぎやかな場所が苦手なようだ。他人と接するのが得意ではないのかもしれない。毎回お母さんに促されおそろおそろ代金を渡してくれる。本を渡したときのちょっと怒ったような、はにかんだような表情は、少しずつ少年の顔になっていく。

お客さんとの何気ない会話、本を渡す営みそのものがNAYA BOOKSに堆積していく。これこそ店の存在意義であろうし、これからを考える土台になる。それを丁寧に見つめ続けたい。売場は小さくても、店を開くたびに多くの素敵なことが起きる。売上はささやかでも、とてもたくさん心の交歓がある。本を扱う喜びがある。

「非効率」のその先へ

先日、とある場所を借りてあるイベントを行った。コンセプトは、「一夜限り一冊の本を販売する本屋」。イベント名を「一篇」とした。並べる本の書名、値段など、一切明かさないうことにした。その日、その時、その場での本との出会いそのものも楽しんでもらいたいと考えた。並べた本は、私自身が読み終えて世界が違って見えた本だ。これからも何度も読み返すであろう本を選んだ。偶然出会うには決して安価とは言えない二〇〇〇円を超える本だったが、

どうしてもこの本でいきたかった。

結果はというと、用意した冊数全てを二時間で完売することができた。大きな喜びと共に、強烈な責任を感じた。

本屋が本を並べるって、本来こういうことだったのではないか。知り得ている限りのこと、想像力の全てを使って本を知ろうとし続け、そこで手にしたものを来てくれる大切な方に伝える。手渡す。それをずっとずっと続ける。イベントで手にしたものはまだ咀嚼しきれないが、これから回数を重ね、様々な対話を重ね、自分の中にあるものが降り積もった時に何かがつかめるのかもしれない。

本や本屋なんて、もともと非効率な存在なのだから、今一度そこを愉しんでどうか。やり方は変えなきゃいけない部分もあるけれど、本や本のある場所の存在意義そのものをあきらめ手放すのはまだ早い。数百坪の売場を持つチェーン書店と、三坪の本屋を往復して、より強くそう思うようになった。

本屋の店頭で二〇年以上本に触れていても日々発見があるって学びがある。試していないことも山ほどある。ちっぽけな売場だとしても何かを実践し続けていけたら、きつとどこかにたどり着く。その景色を見たい。生涯をかけて「何か」に手を伸ばし続けてみようと思う。

◆NAYA BOOKS

栃木県那須烏山市田野倉 43-1

<https://www.instagram.com/nayabooksstakeful>

大学出版部ニュース

表示価格は税込です。

大学出版部協会・活動報告

六月一六日(金) 一四時〇〇分

第二回 営業部会 開催※

六月二三日(金) 一五時三〇分

第二回 理事会 開催※

七月一三日(木) 一四時〇〇分

第二回 編集部会 開催※

七月一四日(金) 一四時〇〇分

第三回 営業部会 開催※

七月二八日(金) 一五時三〇分

第三回 理事会 開催※

八月三日(木) 一三時一五分

夏季研修会① テーマ:『アフターコロナの大学出版活動』

於:文化産業信用組合会議室

八月四日(金) 一〇時〇〇分

夏季研修会② ケーススタディ「慶應義塾大学出版会」

第四回 営業部会

第三回 編集部会

於:日比谷図書文化館

九月八日(金) 一四時〇〇分

第五回 営業部会 開催※

九月一五日(金) 一四時〇〇分

第四回 編集部会 開催※

九月二九日(金) 一五時三〇分

第四回 理事会 開催※

(※) 理事会・部会はZOOMでの開催

北海道大学出版会

▼鮫島和子・鮫島惇一郎・河野昭一・Frederick H. Utech・大原雅著『新・原色図譜エンレイソウ属植物』(A5判・三四頁・三〇八〇〇円)一九八七年刊『原色図譜エンレイソウ属植物』をベースとする増補改訂版。「解説とイラスト」で構成されていた初版に、開花個体、花のクローズアップ、群落の様子、果実、生育環境を基本とする47種の「生態・生育環境写真」を加えた。

▼櫻井義秀・上田絵理・木村純一・佐藤直弘・柿崎真実子著『大学のハラスメント相談室―ハラスメントと向き合うすべての人へ』(四六判・二〇八頁・二六四〇円)北海道大学ハラスメント相談員が、大学のハラスメントを中心にデータ・事例・裁判例・相談室設立運営の経緯等を紹介。

▼木村聡著『日本海軍連合艦隊の研究』(A5判・三四四頁・八二五〇円)連合艦隊とはいかなる組織であるか。陸軍部隊の飢餓と玉碎の裏には連合艦隊をめぐる問題があった。政治・外交・メディア・戦争の分野を横断して、「臨時組織」の権威確立と暴走を実証する。

弘前大学出版会

▼今泉忠淳著『写真集 弘前界限 第5集』(A5判・五四頁・一六五〇円) 既刊の写真集『弘前界限』シリーズの第五集。駅、食堂、商店、横丁、銭湯……すでに姿を消してしまい、もう見る事ができない昭和・平成の「レトロ」な街角の光景が、五〇枚の銀塩モノクロ写真で甦る。



▼小瑶史朗・篠塚明彦編著『教科書と一緒に読む 津軽の歴史』(A5判・一六八頁・一八七〇円) 日本の「周縁」とされてきた津軽の地にも古くから人々の営みがあり、個性的で豊かな文化が育まれてきた。人やモノの交流を通じて日本各地・東アジア世界との深い結びつきを描き出し、この土地で生きた人々の「生」に迫る1冊。好評につき増刷。



東北大学出版会

▼串本剛編『高等教育ライブラリ17 学士課程教育のカリキュラム研究』(A5判・二二六頁・二六四〇円) 学士課程教育という呼称には、かつて学部教育と呼ばれていた時代の反省が込められており、その一つは共通教育と専門教育の分断にあった。本書では、両者一体のカリキュラムを念頭に、実態の一端を悉皆調査に基づくデータセットを使って明らかにする。卒業要件単位数に占める必修単位数の比率およびその規定要因を、人文科学系、社会科学系、理学系、工学系等の9つの分野にわたり比較検討することで、従来は初・中等教育が中心であったカリキュラム研究の対象を学士課程教育にまで拡張することの可能性を探る。

▼西野徳三著『「環境」の基本的な考え方 持続可能な循環型社会をめざして』(A5判・二八六頁・三三〇〇円) 自然と調和し共生する社会、限られた資源やエネルギーが枯渇しない社会、環境破壊や汚染のない社会をつくるために、いま私たちは何をしたら良いのだろうか。生態系を守る循環型で、持続可能な社会をめざす、「環境」の考え方。

流通経済大学出版会

▼ユーリー・ダメノビッチ・ツルゲーネフ／富岡謙二著『中央アジア、魅惑の国・キルギス物語』(A5判・三九〇頁・二九七〇円) 混沌化のこの世。コロナ禍・ウクライナ戦争後の新たな国際交流の広がり、と地上の平和を願って……。



▼中山秀登著『民法の流れ図―相続』(B5判・二一八頁・二七五〇円) 民法の「相続」は遺産に関する市民の気持ちを汲んで規定している。「相続」の目的は遺産の無主物化の回避であることを、沼正也博士の理論をもとに本書で著したところまで言及する。

▼中山秀登著『民法の流れ図―親族』(B5判・一九八頁・二五三〇円) 「親族」の実践原理は弱者を法の強制力をもって無条件に保護することである。本書では、弱者は無条件に保護される権利があり、その義務があるのは、親族か国か、というところまで言及する。

聖徳大学出版会

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『一人ひとりのニーズに応える保育と教育—みんなで進める特別支援』改訂3版〔A5判・二六七頁・一七六〇円〕初學者のための特別支援教育本。コンパクトなハンディサイズに、全障害について、子どもの理解と指導・支援に必要な基礎的知識を盛り込んだ一冊。

▼聖徳大学児童学部児童学科編『新しい児童学への招待』(B5判・一〇三頁・一三五九円) 幼児教育・保育・文化・心理の教授陣四〇名が協働制作した入門書。薄手の冊子に児童学のような素材が凝縮され学びやすい。

▼塩美佐枝・古川寿子・重安智子・井口厚子・関口明子著『教職実践演習—幼稚園教諭・保育士・保育教諭を目指すために』(B5判・一四〇頁・一七六〇円) 幼児教育に携わるために学んできた総まとめとして、いじめ、食育、特別支援教育や、幼・小連携、家庭や地域との連携の大切さを具体例を挙げて説明。総合的な実践的指導力の基礎を修得できる一冊。

慶應義塾大学出版会

▼増田真也・広田すみれ・坂上貴之編著『心理学が描くリスクの世界 Advanced』(A5判・三〇六頁・三七四〇円) 興隆著しい行動経済学やリスクコミュニケーション等の「リスクと意思決定」の応用分野について基礎研究から最新事例までを紹介。「意思決定と生理」の章は必読!

▼岡本正著『災害復興法学Ⅲ』(A5判・四一六頁・三三〇〇円) この国の未来を担うあなたへ。慶應義塾大学で誕生し全国へ広がる人気講座の最新刊が遂に登場。人間の復興を目指すオール・ハザード・アプローチへ到達した第Ⅲ巻。

▼樋口美雄ほか編『日本女性のライフコース』(四六判・二八〇頁・二四二〇円) 昭和の画一的な女性の生き方は、平成・令和を経て、何が変わり、何が変わっていないかを長期パネル調査の結果から多角的に読み解く興味深い内容が満載。

▼遠藤正寛著『輸入ショックの経済学』(四六判・二四〇頁・二六四〇円) 「チャイナ・ショック」など輸入による国内製造業の負の影響(雇用減少・賃金低下)は実際どのくらいなのかを実証分析する。またその緩和政策についても議論する。

専修大学出版局

▼大矢根淳編『復興アダプティブ・ガバナンスの実相—東日本大震災一〇年の中間総括』(A5判・四九六頁・五二八〇円) 東日本大震災から一〇年を経て、専修大学社会科学研究所に蓄積してきた復興研究、災害社会学的復興論と、多くのインタビュを通して綴る、被災者自身による取り組みをとりまとめた一冊。

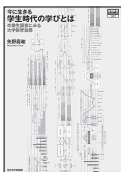
▼専修大学文学部環境地理学科編『山地と人間』(四六判・二六八頁・二六四〇円) 日本人に身近な存在である山。本書は山に対し、地形、気候、生物、災害、歴史、人口、生活、観光といった環境地理学からのアプローチを行う。本書を読むと山を見る目が変わってくる。

▼根間弘海著『大相撲行司の格付けと役相撲の並び方』(A5判・二九二頁・三三〇〇円) 行司の格付けを表す軍配の房色、役相撲の三役の並び方や勝者に唱える行司の口上などをテーマに大相撲と行司をめぐる八つの論考を収録。

▼専修大学編『専修大学史資料集 第五巻 大学昇格への道のり』(A5判・四五〇頁・四六二〇円) 大学昇格前後の動向を知ることのできる資料を収録。

玉川大学出版部

▼矢野眞和著『今に生きる学生時代の学びとは―卒業生調査にみる大学教育効果』(A5判・三三六頁・三五二〇円)大学で学んだことは社会で役立たない」よく聞かれるこうした発言は果たして的確を射ているのか。膨大な卒業生調査のデータを、社会工学や統計分析の知見を活かして実証的に分析。卒業後に生きる大学の教育効果の眞の姿を明らかにする。



▼J・O・ダグラス著／荒井克弘・田中義郎監訳『カリフォルニア州高等教育マスタープラン―アメリカ大学モデルの創出 1850-1960』(A5判・五〇四頁・八二五〇円)一九六〇年に策定されたカリフォルニア州の高等教育計画であるマスタープラン。3セグメント・システムを基本とするその内容と、時代の波に翻弄され激しい政治的交渉を経て実現に至った歴史的歩みを叙述する。格差が拡大する現在、公的な教育機会の平等を目指すしたビジョンを振り返る意義は大きい。

中央大学出版部

▼中央大学経済学部編『やっぱり経済学はおもしろい!』(四六判一八四頁・九〇〇円)『高校生からの経済入門』第二弾。経済学の見方・考え方だけでなく、高校の全教科の勉強がいかに大学で役立つかを解説。「高校の勉強ってどう役立つの?」という素朴な疑問に、経済学を題材に分かりやすく具体的に答える。

▼谷口洋志編著『中国政治経済の構造的転換Ⅲ』(A5判・一七八頁・二三一〇円)中国政治経済の構造的転換の第三弾として、前半では日本の対中ODA、中国経済と世界経済の相互依存関係、中国の対アセアン関係を取り上げ、後半では構造的転換の現状を環境・金融・労働の観点から分析する。

▼日高克平・木村有里・新井利英・樋口晃太編著『SDGs時代を拓くグローバル・ビジネスの挑戦』(A5判・一七六頁・二三一〇円)企業はいま、地球規模の問題を真摯に受け止め企業と社会の持続可能性を高める新たなビジネスモデルを創造しなければならない。SDGs時代の経営実践を社会、経済、国際の視点を交えて探求する。

東京大学出版会

▼遠藤薫・山田真茂留・有田伸・筒井淳也編『災禍の時代の社会学―コロナ・パンデミックと民主主義』(四六判・三〇六頁・二八六〇円)コロナによって顕在化・増幅した諸問題に、社会学が正面から取り組み、民主主義の未来を展望する。

▼長谷川眞理子著『ヒトの原点を考える―進化生物学者の現代社会論100話』(四六判・二四〇頁・二四二〇円)日本を代表する人類学者が、サピエンスの「進化」に照らして、進化の基礎知識からリーダーの資質、Society 5.0まで縦横に語る。

▼石井直方・柏口新二・高西文利著『筋力強化の基本書』(A5判・二三二頁・二四二〇円)研究者、臨床医、トレーナーが多角的な視点でトレーニングの基礎を説く「筋トレのバイブル」!

▼岩沢雄司著『国際法 第2版』(A5判・八七二頁・四八四〇円)国際司法裁判所裁判官を務める第一人者が、国際法の現在の姿を明快に解説する。

▼水町勇一郎著『詳解労働法 第3版』(A5判・一五七六頁・八五八〇円)労働法を詳しく知りたいすべての人に贈る体系書。法改正や裁判例をアップデート。

東京電機大学出版局

▼和田洋六著『実務に役立つ水処理技術』（A5判・二〇八頁・二九七〇円）水処理に関して基礎から応用技術までを90のテーマにまとめた入門書。1テーマを見開き完結でまとめ、左右に解説と図表をレイアウトし、各技術の要点をわかりやすくまとめた。水処理の仕事に従事する技術者やこれから水処理を学ぼうとする方が短期間で学習可能。

▼東京電機大学編『サイエンス探究シリーズ 偉人たちの挑戦（4）化学編』（A5判・一七二頁・三〇八〇円）科学で偉大な発見・発明をした偉人の業績と生涯を分野別に紹介するシリーズの第4巻。会話調の平易な語りと多数のイラストで興味関心を深められる。各章末エピソードで、偉人の精神を受け継ぐ研究者等が最新的话题や新たな展開を紹介。高校の学習指導要領にて「探究学習」が導入、さらに様々な分野を統合し新しい創造を目指す「STEAM教育」で、自ら問い立てし自律的に探究する偉人は最良のモデルとなる。科学への興味関心を喚起するとともに、探究の重要性和社会への影響や価値の大きさを理解する機会になる。

法政大学出版局

▼中村弘行著『寒天』（四六判・三二四頁・三三〇〇円）古来より伝わるトコロテンの歴史を皮切りに、摂津、薩摩、信州、天城、岐阜の寒天産業の盛衰をたどり、樺太での寒天をめぐる知られざる闘争までを描き出す、本邦初の本格通史。

▼根川幸男著『移民船から世界をみる―航路体験をめぐる日本近代史』（四六判・三二二頁・四一八〇円）明治維新期に行われた最初の移民船航海や帝国最初の植民地台湾への航路等を例に、移民の航路体験に則し、近代日本の一面を描く。

▼室井光広著『エセ物語』（四六判・七六〇頁・五五〇〇円）てんでんこな言葉遊び、饒舌きわまる文字もじり、無限の繰り言が東アジアの無意識をあぶり出す。日本語の幽霊的宿命がエロクする室井文学の未完の遺作、易占トリックで最高に文学的な寓話、空前絶後な試みの物語。

▼岡孝著『梅謙次郎 日本民法の父』（A5判・七八〇頁・八八〇〇円）空前絶後、先天的な法律家と称された明治期の法学者、行政官にして教育者・梅謙次郎。激動の時代に民法典編纂という大事業を成し遂げた傑物の生涯を辿る。

武蔵野大学出版会

▼池田眞朗編著『SDGs・ESGとビジネス法務学』（A5判・三八四頁・三三〇〇円）武蔵野大学の法学研究所が実行宣言を出しているSDGsについて、ビジネス法務専攻では重要なつながりを持つESGとともに取り上げた、「武蔵野大学法学研究所叢書」の第一弾。



▼鶴川正樹著『公会計論の研究』（A5判・二四〇頁・二七五〇円）公会計と企業会計の関係を考えたときに、企業会計をそのまま適用するのではなく、また異なる別の体系を作るのではなく、共通の基礎のうえで固有な領域を検討している。



武蔵野美術大学出版局

▼白尾隆太郎著『構成 高橋正人の遺した造形教育』（A4判変型・二五六頁・三八五〇円）モホイ・ナジの全人教育、ジョージ・ケベツシュの「視覚言語」に共鳴した高橋正人の造形教育は、一九四九年に東京教育大学（現筑波大学）で始まった。彼の創設した構成学専攻は一学年八名程度。パウハウス由来の造形教育でありながら基礎課程から専門課程へと進むのではなく、同時並行により両者を発展させる独自のメソッドで「構成」の原理へと迫った。本書「構成の原理」では、高橋の全著作を解析し、卒業生へのインタビュ、当時の課題の再現などで構成とは何か提示する。「構成とデザイン」では、高橋のもとから巣立った勝井三雄の写真表現・幾何学的形態とデザインを構成から読み解く。そして最終章「構成教育の変様」は、高橋の原理を現在のデザイン教育に生かし、実践するための著者による問いであり挑戦である。

「私たちの生活に役立つものを、科学をもっとして考えるのがデザインです」と明言した高橋の姿勢は、これからどのように引き継がれてゆくのだろう。

明星大学出版部

▼樋口修資著『第3版 教育の制度と経営 15講』（A5判・二九八頁・二六四〇円）本書は、主に教職を志す学生の利用を想定していますが、これら教職志望者にとどまらず教育に関心を寄せる一般の方々にも広く読んでいただけるよう、学校教育の制度・経営に関する仕組みの現状とその課題等に関する事柄を、15のテーマに分けて、できる限りコンパクトにわかりやすく紹介する内容となっています。



▼須藤康介著『教育問題の「常識」を問う 第2版』（四六判・二七六頁・一九八〇円）本書は、様々な理論やデータを紹介し、世間一般で語られている教育問題のどれが本当で、どれが誤解なのかを検討して行く。そして、本当としたらその解決方法、誤解だとしたら誤解が生じている理由を考える。

早稲田大学出版部

▼米村みゆき著『映像作家 宮崎駿―（視覚的文学）としてのアニメーション映画』（四六判・二七二頁・二二〇〇円）宮崎監督は原作に依拠しつつ、類まれな脚色力（「翻案」力を発揮すること）、（「視覚的文学」ともいうべき独自の世界を構築してきた。その創作の秘密に、アニメーション研究の最前線に立つ著者が迫る。

▼白木三秀著『変革せよ！ 企業人事部門―テレワークがもたらした働き方革命』（新書判・二一八頁・九九〇円）コロナ禍によるテレワークの普及は、企業の人

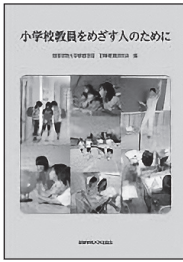
事部門に対し、従業員一人一人が望む働き方を踏まえ、彼らに相応しいキャリア形成を支援する役割を迫ることに。その実態をデータや取材で示しつつ、テレワークに伴う従業員の労働時間規制や正社員の配置転換命令等の法的問題も扱う。

▼范曄著／李賢注／渡邊義浩訳『後漢書本紀（二）』（文庫判・四〇〇頁・一一〇〇円）後漢の事績を歴代の皇帝ごとに記した「本紀」の最終巻。帝国の崩壊と次代への胎動という一大クロニクルを俯瞰する。歴代の「皇后紀」も収録し、巻末には「後漢年表」も掲載。

関東学院大学出版会

▼関東学院大学教育学部 初等教育研究会編『**小学校教員をめざす人のために**』（B5判・一四四頁・一九八〇円）小学校の先生になるには、いまや人間性はもちろん授業や学級経営力、子ども理解や問題対応力まで多面的な資質が求められている。本書は、授業・学級づくりから問題や特別支援対応、また教育実習指導まで幅広い内容を扱い、これから小学校教員をめざす学生や現代課題に関心ある現職教員向けに、また教員採用試験のためのテキストや教員養成課程の副教材としても、大いに役立つ書である。

- 第1章 小学校教員をめざす
- 第2章 学級をつくる
- 第3章 授業をつくる
- 第4章 教育実習に臨む
- 第5章 熟練教員の知恵に学ぶ



名古屋大学出版会

▼シェリル・ミサック著／加藤隆文・嘉目道人・谷川嘉浩訳『**真理・政治・道徳―プラグマティズムと熟議**』（A5判・三二六頁・五九四〇円）ポスト・トゥルースの時代に、熟議によるリベラルな民主主義の足場を再建する意欲作。

▼金井雄一著『**中央銀行はお金を創造できるか―信用システムの貨幣史**』（A5判・二三四頁・五九四〇円）金融政策の「常識」と現実との齟齬を鋭く実証。素朴な貨幣理解を覆し、進むべき道を示す。

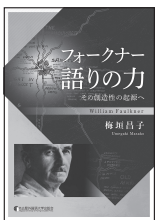
▼トーマス・ラマール著／上野俊哉監訳／大崎晴美訳『**アニメ・エコロジー―テレビ、アニメーション、ゲームの系譜学**』（A5判・四五四頁・六九三〇円）ポケモン・ショックを起点に、トランスメディアの生態系を解明。『アニメ・マシーン』の著者による、新たな時代の映像論。

▼アンドリュース・E・デスラー著／神沢博監訳／石本美智訳『**現代気候変動入門―地球温暖化のメカニズムから政策まで**』（菊判・三三四頁・三八五〇円）懐疑論への応答を交えつつ、問題の全体像を初歩から明快に解説。「文系」「理系」双方へ向けたスタンダードかつ最良の書。

名古屋外国語大学出版会

▼根無一信著『**はじめての比較宗教学**』（A5判・二四七頁・二二〇〇円）ネム船長の哲学航海記第二弾。人間とは何か、人生とは何か、どう生きるべきかを考えることが哲学であるなら、宗教は哲学の一種の表現である。そして一番重要なのは、宗教について自力で考察する力を身に付けること。身近にある宗教行為から所謂世界宗教とその根源まで、楽しく学べる宗教学入門。（二〇二三年九月刊行）

▼梅垣昌子著『**フォークナー―語りの力―その創造性の起源へ**』（A5判・四七〇頁・四九五〇円）「フォークナーが作家として何より重きを置いていたのは、人間の魂の深奥から発せられる生の叫び声だった……」変幻自在なフォークナーの創作世界を貫く「語りの力」に注目した著者が、半生をかけてまとめた精密な論考。知られざる短編から見える、巨大な作家の全体像。（二〇二三年九月刊行）



京都大学学術出版会

- ▼広原盛明著『評伝・西山卯三―20世紀の「すまい」を創った建築家』(A5判・五一二頁・四九五〇円)「食寝分離論」で生活の風景を一変させた西山卯三。戦後復興、高度成長の波に翻弄されながらも、ランドデザインと生活のリアルとの狭間に身を置き続けた建築界の巨人が考えた「すまい」「街」とは何か? 街を描くよるこびと苦悩を詰め込んだ大著。
- ▼小池武著『ライフラインの耐震設計法』(A5判・二八〇頁・四一八〇円)都市の強靱化には、地震に強いライフラインが必須である。本書では特にパイプラインの耐震設計法と耐震安全性に関わる性能設計法を包括的に論じ、設計式の理論的背景や解析精度についても詳述する。
- ▼角哲也・竹門康弘・天野邦彦・一柳英隆編著『ダムと環境の科学IV 流砂環境再生』(A5判・五〇二頁・六九三〇円)洪水・渇水が頻発するなか、ダムの長寿命化と有効活用は不可欠である。そのためにも重要なダムの堆砂対策に焦点をあて、上流から海岸までの土砂の連続性と流砂環境の再生に向けた基本的考え方や課題、実践例を紹介する。

大阪大学出版会

- ▼浦口薫著『封鎖法の現代的意義―長距離封鎖の再評価と地理的限定』(A5判・三六六頁・四八四〇円)二度の世界大戦で英国が実施した長距離封鎖は合法だったのか。そして、海上封鎖は現代でも有効な海戦の方法であり続けているのか。現代でも続くこれら論争に一石を投じ、海上封鎖の統一的な評価基準の提示を試みる。
- ▼清水康次著『「白樺」派の研究―個性と共鳴の時代』(A5判・六一〇頁・八六九〇円)武者小路実篤・志賀直哉らが創刊した文芸同人雑誌「白樺」は、大正期に多くの共感と呼んだ。多彩な個性を持つ彼らはなぜ結束できたのか、なぜ西洋美術に傾倒したのか。謎に包まれた「白樺」派の全容を明らかにする。
- ▼佐藤功編著『はじめてつくる「探究」の授業―「総合的な時間・探究の時間」を極めるためのワークシート』(B5判・一〇四頁・一六五〇円)これから教員を目指す大学生に向けた「総合」「探究」の授業づくりに役立つワークシートと解説。

関西大学出版部

- ▼井上克人著『詩と哲学のあいり―宗教哲学・比較思想論攷』(A5判上製・五一四頁・六二七〇円)人智を超えた超越的次元のものとといかに関わり、思索し、表現するか。詩作と哲学的思索には、ともに語りえざるものを語ろうとする営みがある。本書はそれを踏まえ、宗教哲学と比較思想の視点に立ち、日本文化の深層や禅の本質などを論及している。
- ▼山本英一著『謎解きとコミュニケーション―語用論から西欧の知を考える』(A5判・一七〇頁・一九八〇円)語用論は場面の意味を考える。記号と意味の一意対応はなく、謎解きのように推論を通して最適の解に至る。一方、西欧の学問は、既にある秩序から解を選ぶことはできても、混沌から結論が立ち現れることは許さない。「謎解き」をキーワードに、発話解釈と西洋の知の限界を考える。



関西学院大学出版会

- ▼山中茂樹著『人間の復興』（A5判・三二二頁・五〇六〇円）個人的価値を超越した社会的価値の最大化に重点を置く為政者の「復興方針」は、時に被災者を置き去りにする。被災者こそ復興の主体であり、復興政策の最高・最終の決定権者となる仕組みを探る。
- ▼宮田由紀夫著『アメリカにおける資本主義と大学』（A5判・三三〇頁・四一八〇円）アメリカ社会において、大学も資本主義と無縁ではありえない。大学によるイノベーション、地域経済への貢献、産学連携と学問的誠実性、大学のお金儲け主義など広く考察する。
- ▼金崎健太郎著『税と社会保障の基礎知識―公共経営と社会の仕組み』（A5判・二〇八頁・二五三〇円）公共社会の担い手となる社会人として必要な、国や地域社会の仕組み、税制度、年金・公的医療保険など社会保障制度についての基礎的な知識をわかりやすく解説。
- ▼斎藤武著『現代物理学における力の統一と質量の起源』（A5判・一五二頁・五一七〇円）現代物理学の基礎事項と力の統一の本質。

九州大学出版会

- ▼下野孝文著『遠藤周作とキリシタン―〈母なるもの〉の探究』（A5判・四〇六頁・六三八〇円）長崎を舞台にした小説の執筆にあたり、作家は資料・史料をいかに読み解き、作品に反映させたのか。遠藤周作研究の新たな可能性を示す。
- ▼松尾弘毅著『中世玄界灘地域の朝鮮通交』（A5判・三八四頁・八五八〇円）朝鮮王朝の文書をもとに、日朝交流に携わった日本人通交者の活動を広域性・重層性・多様性の観点から分析する。
- ▼的場恒孝著『公衆衛生学理解―社会医学の視座から』（A5判・二六〇頁・三八五〇円）家庭で、学校で、職場で、社会で「健康で文化的な」生活を営むために、公衆衛生はどうあるべきか。コロナ禍を経た今、その意義を説く。
- ▼幸節雄二著『液体ロケットの構造システム設計改訂版』（A5判・二五八頁・四四〇〇円）厳しい開示規制に触れることなく、公開文書をもとに液体ロケット機体構造開発手法の全貌を明らかにする。

編集後記

▼「本屋」ではなく「本のある場所」という言葉にこだわって、本特集を企画した。一冊の本を売買するという経済的な関係をこえて、本に囲まれたり、本をやりとりする行為のどこのなかに、私たちは魅了されているのか。四名の論考とおして深く考えてみたかったからだ。

▼本誌の執筆者の一人であり、特集の枠組みについて助言をいただいた渡辺佑一氏は、「本の近くに」と、いいことがある」を座右の銘にしている。本特集の核心をつくひと言ではなからうか。そこには、なにか「いいこと」があるかもしれないと信じる力が、「本のある場所」をつくる。ぜひ、身近にある「本のある場所」に足を運んでみてほしい。

【訂正】前号（一三五号）に以下の誤りがございました。お詫びのうえ訂正いたします。

*表紙

【誤】大西光平著「リアル」を掴む

【正】大西公平著「リアル」を掴む！

*一〇頁（上段 四行目）

【誤】教育人事

【正】教員人事

大同印刷(株)	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20 TEL 0952-71-8550 https://www.daidou-jp.com
ダイニック(株)	〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル TEL 03-5402-1811 https://www.dynic.co.jp
(株) 太平印刷社	〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16 TEL 03-3474-2821 http://www.p-taihei.co.jp
(株) 太 洋 社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1 TEL 058-324-2111 https://www.p-taiyosha.co.jp
(株) 竹 尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6 TEL 03-3292-3617 https://www.takeo.co.jp
(株) 東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区猿楽町1-2-1 TEL 03-3291-1771
(株) とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F TEL 03-5148-7200 https://www.toko-ai.com
東光整版印刷(株)	〒135-0006 東京都江東区常磐2-12-15 TEL 03-3632-0801
(株) トーヨー企画	〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7 TEL 075-411-8288 https://www.talligent.jp
図 書 印 刷 (株)	〒114-0001 東京都北区東十条3-10-36 TEL 03-5843-9700 https://www.tosho.co.jp
(株) 日新広告社	〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F TEL 03-3263-9431 http://www.nissinkoukokusya.com
(株) 日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 TEL 03-6256-7528 https://www.nikkei.co.jp
日本宣伝販売(株)	〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278 TEL 048-620-1021 http://www.nihon-senden.jp
(株) 博 報 堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F TEL 03-6441-6711 https://www.hakuhodo.co.jp
藤 原 印 刷 (株)	〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5 TEL 03-3291-0191 https://www.fujiwara-i.com
(株) 平 文 社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7 TEL 03-3944-0301 http://www.heibun.co.jp
(株) 毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 TEL 03-3212-3340 https://www.mainichi.co.jp
誠 製 本 (株)	〒174-0042 東京都板橋区東坂下1-19-5 TEL 03-3967-3952 http://www.makoto-seihon.com
(株) ミ ヤ コ シ	〒275-0016 千葉県習志野市津田沼1-13-5 TEL 047-493-3854 https://miyakoshi.co.jp/
名鉄局印刷(株)	〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南3-13-23 TEL 052-561-3272 http://www.meitetukyoku.co.jp
(株) 遊 文 舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31 TEL 06-6304-9325 http://www.yubun.co.jp
(株) 読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1 TEL 03-3242-1111 https://www.yomiuri.co.jp

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

- (株) 朝 日 新 聞 社 〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
TEL 03-5540-7749 <https://www.asahi.com>
- 重 細 重 印 刷 (株) 〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
TEL 026-243-4858 <http://www.asia-p.co.jp>
- (株) ア ベ ル 社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2 東京三和ビル301
TEL 03-6256-8133 <https://www.abel-sha.com>
- 尼 崎 印 刷 (株) 〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
TEL 06-6494-1122 <http://www.amain.co.jp>
- 英文校正エナゴ 〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2波ビル4F クリムゾンインタラクティブジャパン
<https://www.enago.jp/>
- (株) A L E 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階
TEL 03-5652-8627 <http://www.adv-logi-eng.co.jp>
- 王 子 製 紙 (株) 〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
TEL 03-3563-7072 <https://www.ojipaper.co.jp>
- (株)加藤文明社印刷所 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE
TEL 03-3261-8281 <http://www.bunmeisha.co.jp>
- 城 島 印 刷 (株) 〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
TEL 092-531-7102 <https://www.kijima-p.co.jp>
- (株) 条 川 印 刷 〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7
TEL 03-3943-9811 <http://www.kumekawa.jp>
- 港北メディアサービス(株) 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
TEL 03-5466-2201 <http://www.kohoku.co.jp>
- ㈱コングレゴロ・バルコミュニケーションズ 〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5 オンワードパークビルディング5階
TEL 03-3510-3750 <https://www.congre-gc.co.jp>
- 三 松 堂 (株) 〒101-0065 東京都千代田区西神田3-2-1 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
TEL 03-6823-5360 <https://www.sanshodo.co.jp>
- 三 美 印 刷 (株) 〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
TEL 03-3803-3131 <https://www.sanbi.co.jp>
- 三 立 工 芸 (株) 〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
TEL 03-3261-5171 <https://www.sanritsu-net.co.jp>
- 三 和 印 刷 (株) 〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1
TEL 026-285-2300 <http://www.sanwaprinting.jp>
- 信 濃 印 刷 (株) 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
TEL 03-3237-3601 <http://www.shinano-insatsu.co.jp>
- (株) 渋谷文泉閣 〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7
TEL 026-244-7185 <http://www.bunsenkaku.co.jp>
- (株) 眞 興 社 〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2
TEL 03-3462-1181 <https://www.shinkousha.co.jp>
- 新 日 本 印 刷 (株) 〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
TEL 03-3269-3611 <https://www.sinnihon.net>
- (株) 精 興 社 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9
TEL 03-3293-3021 <https://www.seikosha-p.co.jp>
- 創栄図書印刷(株) 〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766
TEL 075-255-2288 <https://www.soiei-pb.co.jp>
-

マルクス・ガブリエルの哲学

—ポスト現代思想の射程

菅原潤 著

四六判並製 276 頁 定価 2,750 円 ISBN:978-4-409-03126-1

未邦訳の主著三冊『意義の諸領域』『諸々のフィクション』『暗黒時代における道徳的進歩』を読み解き、その思想の全貌を探る初めての試み。

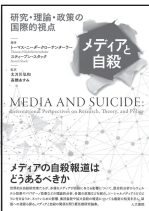


メディアと自殺 —研究・理論・政策の国際的視点

トーマス・ニーダークロウテンターラー/スティーブン・スタック編著
太刀川弘和/高橋あすみ監訳

A5判並製 270 頁 定価 3,960 円 ISBN:978-4-409-34063-9

世界的な自殺研究者たちが、多様なメディアが自殺に与える影響について、歴史的な分析からウェルテル効果やパパゲノ効果などの理論的分析、各国の政策などを紹介。メディアと自殺の関係を問う最先端研究論集。



音楽と政治 —ポスト 3・11 クロニクル

宮入 恭平 著

四六判並製 276 頁 定価 3,080 円 ISBN:978-4-409-04125-3

3・11 は音楽と政治の関係を変えた。サウンドデモ、SEALDs、斉藤和義〈ずっとウソだった〉、RADWIMPS〈HINOMARU〉…。未曾有の事態が次々と押し寄せるなか、音楽はどんな姿を見せたのか。



入管を問う —現代日本における移民の収容と抵抗

岸見太一/高谷幸/稲葉奈々子著

四六判並製 272 頁 定価 2,420 円 ISBN:978-4-409-24158-5

多角的な観点から入管政策を問い直し、その特質と構造を明らかにする。入管行政によって排除された無登録移民が「社会的に生きられる」社会を実現するための嚆矢となる一冊。



2刷 つながりからみた 自殺予防 太刀川弘和著 ¥3080	2刷 フエミニスト・ キルジョイ アーメッド著 ¥4950	5刷 99%のための フエミニズム宣言 N・フレイザーほか著 ¥2640	2刷 ゾンビ学 岡本健著 ¥3080	8刷 有限性の後で メイヤー著 ¥2420	重版出来 じゅうはんしゅたい
--	--	---	------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------

人文書院 〒612-8447 京都市伏見区竹田西内畑町9 X(旧)Twitter @jimbunshoin (税込)
TEL075-603-1344 FAX075-603-1814 http://www.jimbunshoin.co.jp/

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覧

●北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北 9 条西 8 丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

●弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町 1 番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

●東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平 2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

●流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畑 120
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

●聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬 550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

●慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田 2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

●専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町 3-10-3
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

●玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園 6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

●中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野 742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

●東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場 4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

●東京電機大学出版局

〒120-8551 足立区千住旭町 5 番
TEL 03-5284-5385 FAX 03-5284-5387

●法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北 3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

●武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町 1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

●武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町 3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

●明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保 2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-591-9254

●早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田 1-9-12
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

●関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市長沢区六浦東 1-50-1
TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

●名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市中千種区不老町 1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

●名古屋外国語大学出版会

〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山 57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503 FAX 0561-75-1723

●京都大学学術出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町 69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

●大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘 2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

●関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

●関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町 1-155
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-5870

●九州大学出版会

〒814-0001 福岡市早良区百道浜 3-8-34
九州大学産学官連携イノベーションプラザ 305
TEL 092-833-9150 FAX 092-833-9160

●大阪経済法科大学出版部 (休会)

〒581-8511 八尾市楽音寺 6-10
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

【発行所】

一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北 1 丁目 14 番 13 号
メゾン萬六 403 号室
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
E-mail : mail@ajup-net.com
URL : <https://www.ajup-net.com/>

【表紙デザイン】 奥定泰之

【表紙写真】

「本のある場所」が読者をつくる

photo : Solovieva Liudmyla / shutterstock.com



*本誌のバックナンバーは、大学出版部協会の公式 HP でも、PDF 版を全文無料でダウンロードできます

大学出版 136 号 (2023 年秋)

2023 年 11 月 1 日発行

頒価 100 円 (千共)